



CRN設立10周年記念号

10th ANNIVERSARY

特別インタビュー

# 子ども・メディア・教育

石井威望 (CRN 顧問・東京大学名誉教授)

聞き手：河村智洋 (CRN 外部研究員)

サイバー子ども学研究所

# CRN

チャイルド・リサーチ・ネット

# CRNの10年を振り返って

チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）を設立して10年になったが、そもそもは1992年5月、The Norwegian Centre for Child Research（「ノルウェー国立子ども学センター」）によってベルゲンで開催された国際会議“Children at Risk”が出発点であった。20世紀冒頭に、スウェーデンの教育者エレン・ケイが「20世紀を子どもの世紀に」と呼びかけたが、世紀末になっても、世界の子ども達の色々な形の危機状態は消えず、そのために我々は何をするべきかを考えるのが目的だったと言える。

それに招かれた私は、特別講演“Child Ecology, Perspectives on Child Health”を行った。世界に広がる多様な「子ども問題」“children's issues”の解決には、自然因子、物理化学因子、生物因子ばかりでなく、情報としての社会文化因子も含めて、生態学の生物学理論で捉える必要があることを述べた。

国際会議終了後、各国の代表的な研究者、実践者が20人程招かれて、まず何をなすべきかを、美しいフィヨルドが見えるホテルに泊り込んで話し合った。その結果、子どもに関係する世界の研究者、実践者をインターネットでつなぎ、話し合い、より良い方策を見出そうということになった。そして、その中心となる Childwatch International (CWI) がノルウェーに設立された。

子どもは「生物学的存在」として生まれ、「社会的存在」として育つ。子ども問題を考えるには、学際的、環学的な人文科学と自然科学を融合した新しい科学としての「子ども学／Child Science」が必要であると、個人的には1970年代中頃から考えていた。ベルゲンの一連の出来事で、改めて「子ども学」を体系づけ、日本子ども学会（2003年設立）もつくりたいと考えた。「子ども学」の普及とこの国際的な動きに対応するために、国立小児病院を退官した1996年、Benesse Corporationの当時の福武総一郎社長（現会長）の御支援により設立したのが、CWIのkey institutionになっているサイバー子ども学研究所“Child Research Net (CRN)”である。

設立に際しては、システム工学者の石井威望先生に御指導頂き、当初、ノン・プロフィットの組織とするため、福武教育振興財団の事業として活動を始めた。現在は森本昌義社長の御支援を頂き、Benesse 次世代育成研究所（社長・岡田晴奈、所長・小林登）の附属組織として運営されている。幸いアクセス数は1日3万件程あり、日本語版が最も多く、英語版、中国語版と共に、多くの方々の御支援により大きく発展している。

10年の節目を迎え、この機会に我々は、21世紀こそ子どもの世紀にすることを目的として、更なる発展を目指しているところである。

CRN所長 **小林登**





CRN設立10周年記念号

c o n t e n t s



21世紀を創造する  
サイバー子ども学研究所

2

特別インタビュー

子ども・メディア・教育

4

石井威望 (CRN 顧問・東京大学名誉教授)

聞き手：河村智洋 (CRN 外部研究員)

CRN  
10年の足跡

8

「子ども学」の広がり

14

CRNの子ども研究支援

国境を超えての活動

16

中国語版開設後の“児童科学”

日中英3サイト紹介

多言語で世界に向けて情報発信

18

CRN ユーザーの声

20





# 21世紀を創造する サイバー子ども学研究所

Web2.0の時代となっても、  
インターネットで世界をつなぐ  
という夢を見失うことなく、  
ベルゲンの国際会議の理念を  
実現していく活動を  
続けていきます。

## CRNが誕生した頃

チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)は、ウェブサイトを  
通じて、子どもに関心のある  
人々をつなぐサイバー子ども  
学研究所です。小林所長が、  
1992年ノルウェーのベルゲ  
ンの国際会議で「世界の子ども  
に関心をもつ人々たちをインタ  
ーネットをつなごう」という提案  
を受けたのが誕生のきっかけで  
す。設立されたのは国際会議の  
4年後であり、昨年で10年目を

迎えることになりました。

CRNが活動を始めた  
1996年当時はパソコンの世  
帯普及率は16%、インタール  
トの世帯利用率は3%に過ぎま  
せんでした。使用者の多くは研  
究者やビジネスマンであり、子  
どもに関心の高い主婦層など  
はまだまだ浸透していません  
でした。その頃はアクセス数を  
伸ばすことがもつとも重要な課  
題となりました。

しかし、1999年頃からイ  
ンターネットの利用者が急激に  
増加し、それにともないCRN  
へのアクセス数も伸び始め、さ  
らに2001年にはパソコンの  
世帯普及率もインタールトの  
世帯利用率も50%を超えるよ  
うになり、月のアクセス数が80万  
件を超えるようになりました。  
サイトが活性化した原動力と  
なったのはフォーラム(掲示板)  
でした。とくにいじめや学級崩

壊、子どもの犯罪などが世間の  
話題になると、それにともない  
参加者の間で激しい議論の応酬  
がなされました。現代の子ども  
たちは危機に陥っているとい  
う認識のもとでの熱い議論であ  
り、人々の生の声を聞く意義は  
ありましたが、残念ながら生産  
的な議論に発展することはほと  
んどなく、インタールトの可  
能性とともに関界についても考  
えさせられました。そして、子  
どもたちの成育環境の向上に役  
立つサイトにしていくための方  
向転換を余儀なくされました。

## 共通言語となる リソースを探す

2002年頃からCRNは情  
報リソース提供の活動に力を入  
れ始めました。「国内外の研究  
者の研究論文」「アンケート調  
査のデータ」「学術集会やシン





ボジウム、インフォメーション」など、子どもに関する基礎資料をデータベース化していき

ました。また、独自に子どもたちと接触する場を設けて、プレイフル研究やサイエンス・トークなどのワークショップやイベントを実施し、それらの研究成果をサイトに掲載していく活動も行いました。さらに子ども学の研究会も定期的に開催し、発達心理学、進化生物学、脳神経科学、小児科学などの多様な分野の研究者の方々に集まっていたとき、理論的な面も深化させていきました。

CRNのキーコンセプトである「子ども学／Child Science」は、特定の専門分野に偏らず、学際的に人々の興味関心をつなぎ、学問を開かれた場に戻して、活性化させる創造的な学問です。そのような子ども学の自由な発想を形にするにはインターネットは格好のツールです。しかし、たんに異なる考え方をもった人々が集うというだけではなく、そこには対話の相手を尊重するマナーとともに、議論の前提となる共通言語が求められます。CRNは子ども学を探究するための情報リソースを提

供する場として発展していきました。

従来、子どもに関する学問は子どもへの願いや教育観によって主義主張が異なりやすく、また、それぞれの国の政治や文化の影響を色濃く受けて、普遍性をもちにくいという特徴があります。しかし、20世紀後半からのヒューマン・サイエンスの著しい進展により、子どもを考える上での共通言語が求めやすくなり、CRNの活動にもその成果が徐々に反映されていくようになりました。

### 活動理念を 見失うことなく 新しい時代へ

21世紀に入ると、インターネットのプロードバンド化はますます進み、当初の世界をつなぐツールとしての側面よりも、娯楽情報やビジネス情報を運ぶ商業的なメディアとしての側面が強くなり始めています。また、一方では家電製品のように日常的なものとなったことで、身の回りのよもやま話をやり取りするだけの内向きの「おしゃべりツール」とも化しています。時

間的・空間的・コスト的な制約をほとんど受けずに、世界中の人々が文字・音声・画像をやり取りし、共同研究ができる夢のツールであることが忘れ去られようとしているのです。

このような時代であるからこそ、改めて小林所長が参加したベルゲンの国際会議での「世界の子どもに関心をもつ人たちをインターネットでつなごう」という提案を思い起こすことが必要になってきています。その国際会議のテーマは「Children at Risk（危機にある子どもたち）」でした。地球規模の環境問題、経済格差、地域紛争が拡大しているいま、このような問題意識はますます重要になってきています。

Web2.0の時代となつて、CRNのような充実した総合サイトは徐々にその役割を終えつつあるのかもしれない。ブログと高度な検索エンジンが個々のサイトをどんどん軽量化しているからです。そのような情報環境の変化に対応する新しい試みも、今後必要になってくると思われます。

しかし、サイバー子ども学研究所の「子どもの生命の仕組み

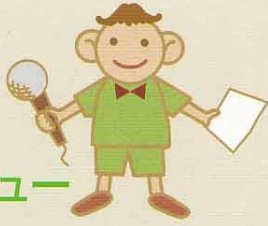
と子どもが生きる生態系のあるべき姿を追究する新しい学問の枠組みをつくる」「子どもについて研究する世界中の人々と交流をはかり、情報や知恵を交換していく」という活動理念は、今後も見失われてはなりません。子ども学とインターネットの考え方はともにCRNには欠かせない重要なファクターなのです。

CRNは日本語サイトだけではなく、英語サイトや中国語サイトを設けることで、海外の研究者たちとの交流も積極的に行い、当初の目的どおり国境を超えた人々とのつながりを実現させつつあります。たった一つのパソコンからの発信が、人類への貢献へとつながる可能性もある。そんな素朴な夢も、まだまだ捨てる必要はないのではないのでしょうか。

子どもにとって優しい社会とは大人にとっても優しい社会です。子どもを考えることは未来を考えることです。CRNはこれからも21世紀を子どもとの世紀と位置づけ、すべての子どもが健やかに成長できる世界を追求していきたいと思えます。







特別インタビュー

# 子ども・メディア・教育



石井威望 (CRN顧問・東京大学名誉教授)

聞き手：河村智洋 (CRN外部研究員)

メディアは子どもたちをどう変えるのか。メディアは教育に何をもたらすのか。私たち大人はまだその答えを見つけてはいない。CRNでの10年を振り返りつつ、「子ども・メディア・教育」の未来について考えてみたい。

## イノベーション教育が重要になる時代

**河村** 本日は10年前のCRNの設立時から顧問としてアドバイスをいただいている石井先生に、まずメディアの10年後を予想していただき、さらに未来へ向けてどのような教育がなされていくべきか、お話しただければと思います。**石井** 未来を予測するというのは、これはなかなか難しいですね(笑)。現代社会のように技術革新の速度が速くなると、10年経つと世の中はがらっと変わってしまいます。

私が慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)\*1に東京大学から移ったのが1991年。あの頃、SFCは最先端の情報環境を誇る大学で、当時の一流企業よりもシステムはずっと充実していました。あなたはSFCの一期生だからわかるだろうけど、全国の企業や大学から毎日視察が絶えなかったものです。ところが、いまではSFCのような情報環境は、企業はもちろんだこの大学でも日常的なものになっています。

また、90年代の半ばから、日本は「失われた10年」といって、ずっともがき続けてきました。ところが、米韓に遅れを取ったと言われていたブロードバンドも、

2005年には日本中の家庭に入るようになり、その普及率はアメリカを上回るまでに成長しました。そんなふうには10年後というのは常に予測を超えています。

これからの10年間もどんなことが起こるのかは、確実な予想はつきません。ただ、現代の世界経済のあり方を考えると、これからの10年間には教育のもつ価値がとて高くなるということだけは言えるかもしれません。

米国の競争力評議会が米IBM最高経営責任者(CEO)サムエル・バルミサノ氏を委員長として2004年に取りまとめた報告書「イノベート・アメリカ」\*2には、グローバル化社会においては人材(イノベーション教育)が最重要視されると記されています。

バルミサノ氏は、アジアのエマージングタイガース\*3が追い上げてきた理由は、低賃金にあるのではなく、それらの新興国が科学技術教育、とくに情報化を中心としたイノベーション国家戦略を強力に推進した成果だと強調しています。

報告書がそのような主張を展開した背景には、2001年9・11の同時多発テロを機にアジアを中心とする頭脳労働者の流入を制限した結果、アメリカの産業が立ち行かなくなったことへの危機感があります。つまり、現在のアメ

\*1 SFC

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス。1990年に総合政策学部・環境情報学部の2つの学部からスタート。グローバル時代に即応できる人材を開発するために学内をインテリジェント化してIT環境の整備を行い、未来の大学のモデルとして注目を浴びた。

\*2 イノベート・アメリカ

イノベートは革新すること。技術だけではなく社会構造も含めた新基軸を打ち出す活動を指す。同報告書では米国が今後競争上の優位を維持するためには、イノベーションに最適な社会構造をつくるべきだという主張がなされている。委員長の名前をとり「バルミサノ・レポート」とも呼ばれている。

\*3 エマージングタイガース

中国、インド、韓国などアジアを中心とする、急速に発展した新興イノベーション地域のことを指す。





リカを支えているのは低賃金の労働者ではなく、アジアを中心とする新興国で高い教育を受けてきた知的労働者であることが認識されたのです。彼らへの依存過度に陥らないためには、国内のイノベーション教育を振興し、イノベーションに最適なバランスで人材を得なければならぬと同報告書は結論つけています。

日本もブロードバンド・インフラが世界のトップクラスになったのだから、その潜在能力を十分發揮させるためには、人材の育成が今後の最重要課題になると思います。そのような観点から日本でも「イノベート・アメリカ」に対抗して、「イノベート・ジャパン」が意識されるようになってきました。

### とことん遅れた メリットを活かす

**河村** そのようにイノベーション教育が世界のビジネスの場で強調され始めていることは、日本の教育現場ではほとんど意識されていないのではないのでしょうか。

私はCRNで子どもとメディアの研究をしてきましたが、この10年間のメディア環境の急激な変化にともない子どもたち自身も進化してきたと感じています。5年くらい前までは子どもたちは中高

生になって携帯からネット生活に入っていたのですが、いまは小学生的の頃からブロードバンドのパソコンに親しんでいます。文章だけでなく、映像や音楽なども自由にやり取りして、ブログなどを使いこなしながら自分で情報を発信することがふつうになってきています。

そのような子どもたちは学校のコンピュータ教育には何も期待していなくて、あきらめのようなものを感じているのがよくわかります。学校と子どもたちのギャップは埋めたいものがあります。

私がSFCを卒業した1994年頃には、SFCに匹敵するような情報環境は世の中にはありませんでした。その頃から比べると、ビジネスの場もアカデミズムの場も格段に進歩しました。しかし、公教育の場だけは変わりませんでした。むしろ、総合的な学習の時間をどうするべきかという論議が盛んだった5、6年前と比べても、現在は後退している印象です。この落差をどうしていけばいいのでしょうか。

**石井** もし、本当にそうであるのなら、決定的に出遅れてしまった現状を認めて、思い切った一からやり直すのも手ではないかと思えます。建前論でごまかすことをやめて、子どもの方が進んでしまっただ実態を素直に認めて、下手に学

校でパソコンなど教えない方がいいかもしれない。ただ、私は基本的に公教育に関してはあまり悲観的ではありません。というのは、いままではパソコンをろくに触ったこともない先生たちが付け焼刃で教えていたかもしれないが、これからは子どもの頃からパソコンを使いながら先生たちが教えることになるだろうから、授業に活かす方法などいくらでも思いつくはず。そうならば、ほっておいても時代にふさわしい公教育が実現すると思います。

それに遅れたことのメリットかもしれないけれど、このところ明らかに増えてきたコンピュータの弊害から子どもたちが免れたというところもあるのではないかと思えます。ネット社会の光と闇の問題もあります。コンピュータそのものが子どもの思考力に影響を与えていることがわかってきています。最近NHKの「クローズアップ現代」でも取り上げられていますが、キーボードばかりで手書きをおろそかにすると、漢字が書けなくなったり、覚えられなくなったりするらしいのです。だとすると、子どもたちが学校現場でキーボードに浸り切らなかつたのは、いまになって思えば正しかったのかもしれない。

**河村** それはまったくその通りです。漢字は覚えなくても変換で出

てきてしまうので、私もまったく覚えられなくなりました。そしてどんどん忘れていく。大学院の修士の試験の時には、ひらがなとカタカナで解答を書くはめになりました。最近では親の名前さえも漢字で書けない自分に気がついて愕然としています。

**石井** テクニカルチームはカタカナが多いから、なんとか切り抜け

Takemochi Ishii



られたということかな(笑)。実は、漢字というのは、手を踊りのように躍動させながら書いて覚えるものであって、出てきたものを目で見て選んでいるだけでは覚えられないものなのです。私は、そのことを知っていたわけではないのですが、入力はずべてペン手書き式入力です。ザウルス\*4の画面に手書きで原稿を書くので、漢字を忘れたり、書けなくなることは幸いありません。

教育現場にコンピュータを持ち込むときには、そのような点も含めて、一から検討し直し、遅れてしまったメリットを活かすようにすればよいのではないのでしょうか。とくに国語教育に関しては、将来パソコンで文章を書くことを前提として、子どもの頃に何を徹底して教えておくべきかを考えておく必要があると思います。

## 学ぶ順序が逆になっている

**河村** 確かに基礎基本の見直しという点では慎重であるべきだと思いますが、一方で教養教育に関してはもっとメディアのよさを取り入れることはできると思います。最近、私は漫画で『三国志』を読んだのですが、そうしたら、それまで漢字だらけで大嫌いだっただ

国史が急に好きになって、夢中になって勉強してしまいました。最初は『三国志』の時代だけを学んでいたのですが、そのうち中国史の全体を知りたくなって、古代からの流れが一目瞭然とわかるものはないかと探し回り、それで行きついたのは学校の教科書でした。

そのときに思ったのは、私たちがやらされていた学校の勉強は、順序を逆にして学んでいたのではないかとということです。まず、関心をもたせるような体験をさせて、いろいろ調べさせて、最後に教科書で整理するという流れではないかと思えます。でも、いまの学校の勉強はそうになっていない。背景も何もわからない知識を、大変な努力をして、とにかく覚える。しかし、もともと背景がわかっているのに、深くは理解されない。そして、それが活かされるべきときには、ほとんどが忘れ去られているのだらうと思えます。

高校の必修科目の未履修問題が話題になりましたが、ブロードバンド時代の歴史や地理の学習のあり方をもっと検討してほしいと思います。

**石井** ブロードバンドが登場するまでは、私たちは他人によって編集されたコンテンツにしか出会っていませんでした。そのように整

理されたエッセンスを与えられても、元々どんな背景からその知識が出てきたのかわからないので、理解できないということになりま。本来は未整理の情報を与えて、本人に好奇心をもたせ、それを整理させるのが学習なのに、それをやっています。だから無味乾燥な機械的暗記を強いる学習になってしまうのです。もちろん、暗記は学習の大切な要素だが、偏重の度が過ぎてはよくないと思います。

先日、私の秘書が仕事でタイに行ったときに、偶然軍事クーデターに遭遇しました。彼女はその様子をタイプU\*5を使って映像で日本に送ってきてくれたのですが、それを見てるとニュースでやっている映像とかなり違っています。ニュースでは街中を走る戦車ばかり映すので、さぞかしすごいことが起きているのだらうと思っていたのですが、彼女が空港から送ってくる映像はいたって静かで、空港ロビーでは何も起こっていないかのように見えます。流す映像によってずいぶんクーデターのイメージも変わってしまうことが、よくわかりました。

そうやってリアルタイムで自分の知り合いが映像を送ってくるのと、それはまったく個人的な体験となり、決して忘れない出来事となります。これは新聞を読んだ

りテレビを見たりしているのとは違わし、教科書や本を読んでいるのとも違います。ネットワークが生み出した新しい体験の型と言えます。これからの子どもはそういうリアルタイムの体験が当たり前になってきて、自分自身や知り合いの体験を自己編集するようになり、車を自分で操縦するようにメディアを使いこなしていくことになると思います。

そのような日常の体験は体系化されていないからすぐに知識にはならないけれど、記憶としては確実に残ります。その原材料を基にして学習すると歴史や地理も実のあるものになるのではないのでしょうか。

**河村** ルソーは『エミール』\*6の中で、「大人はいつも最後の結果から教えようとする。だから子どもはわからなくなる。子どももしっかりとした判断力をつけさせたかったら、まず知識のもととなる体験をさせ、そこで感覚的に事物と出合って、最後に知識に至らしめるべきだ」というようなことを言っています。

**石井** そういう意味では教育の原点に戻ることなのかもしれない。また、実はそれは大人でも同じで、記号としての言葉では人間は真の理解に至るのは難しいでしょう。人間は出来事ではなく学べないようになっています。

\*4 **ザウルス** シャープが開発した電子手帳。モバイルパソコンの役割を果たし、手書きで電子メモを取ることができる。



\*5 **タイプU**

ソニーが開発した文庫本サイズのモバイルパソコン。ウィンドウズPCとしては世界最小・最軽量。内蔵カメラとマイクで無料ビデオ通話(TV電話)もできる。(ブラインス トールされた「ビデオス カイブ」利用)



\*6 **『エミール』**

18世紀に物語風に書かれたルソーの教育改革論。子どもを社会の悪影響から守り、自然の状態に戻すことを本来の教育の役割とした。



## 子どもたちには 説明書はいらない

**河村** 私が子どもと付き合っていて驚くのは、子どもたちのメディア機器のマスターの仕方がとつもなく早いことです。説明書も読まずに、みんなで遊んでいるうちに、機械の特徴や使い方をあつという間に覚えてしまう。あれは本当に不思議です。

**石井** もともと子どもはそういう能力をもっているのだけれど、もっていないと大人たちは誤解しているのでしょう。私の経験からすると、若ければ若いほど適応力があつて、使いこなすまでの時間が短いように思います。

**河村** 子どもたちには説明書という概念がないですね。いきなり操作を始めてしまう。

**石井** 先ほどの『エミール』ではないけれど、大人は最終的に知識がまとめられた説明書から入ろうとします。体験もしてないうちから、全体を知識として知ろうとします。だからメディア機器がとても難しいものや面倒くさいものにも思えてくるのです。そして結果的には覚える速度が子どもよりも遅くなってしまう。

私が講演などに新しいメディアを持つていくと大人はすぐに説明を求めます。原理を教えてください

いと言ひ出します。そんなもの話したつてすぐにわかる訳ないのだから、まず使ってみればいいし、使っている人を脇で見ればいいのに、言葉がほしくなるのですね。メディア教育で本当に大切なのは思わず手にとつていじり始める感覚だと思ひます。説明書を勉強しようとするのはその感覚とは合つていません。もつといえ、ツールにこだわるのもおかしいのです。ツールが先にあるのではなくて、まずはやりたいことがないと。ツールにこだわるから、コンピュータ教育という、機器の操作ばかりになつて、手段が目的化してしまつたのでしょうか。

## メディアで子どもの 潜在的な思ひを引き出す

**河村** メディアばかりに夢中になると、情報に振り回されると言ひますが、私はかえつて学校のオーソドックスな勉強の価値がわかるようになった気がします。

**石井** メディアという、すぐ新しいものと大人は考へてしまひかもしれませんが、人間がやりたひことや知りたひことは、決して新しいこととは限りません。技術の制約があつたためにできなかっただけで、本当は昔からやりたひかつたことがいま実現しているだ

けかもしれないのです。

いま子どもたちの中にはキッズ携帯を持つている子が増えてきています。あれには安全確保のためにGPS機能がついています。GPSを使うと宇宙からの視線で自分の位置を確認することが出来ます。これはとても新しい感覚だと思ひます。でも、この宇宙からの視線を通じて、自分の位置を確認するというのは、星空を眺めていた昔の遊牧民や船乗りはみんな持つていた感覚であつて決して新しいものだとは言ひません。要するに、人間がやりたひことは昔から人類がみな考へてきたことだったりする訳です。その意味では、メディアの時代は人間を再発見する時代だとも言ひます。

教育はドイツ語では *erziehen* といつて、引き出すという意味からきています。メディアによつて子どもの潜在的な思ひを引き出すことができれば、それは教育にとつては大いに価値があります。人が変わるときのポイントは好奇心。おもしろいものを見せてあげれば、自分もやつてみたい、できるようになりたひと思ひます。子どもにだけだけ印象的な体験をさせてあげるかが重要だと思ひます。

**河村** カリキュラムやツールにこだわるのではなく、自分の知りたひと思ふことをストレートに知る

うとする。そのためにメディアを活用する。そういう自由な精神がこれからの子どもたちには求められるのかもしれませんが、CRNではこれからも子どもたちのメディア研究を進めていきたいと思ひます。本日はどうもありがとうございました。

(文・構成 木下真)

### 石井威望 (いしい・たけもち)

専門はシステム工学・マルチメディア等。1930年生まれ。東京大学医学部と工学部を卒業後、通産省勤務、東京大学教授を経て同大学名誉教授。同時に慶應義塾大学教授に就任、現在同大学客員教授、東京海上研究所研究顧問、NTTドコモ・モバイル社会研究所所長。政府の国土審議会会長ほか各種委員を歴任。現在IT推進本部情報セキュリティ専門調査会座長。著書に『モバイル革命』『iバイオテクノロジーからの発想』(ともにPHP研究所)など多数。

### 河村智洋 (かわむら・ともひろ)

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科研究員。1971年生まれ。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程卒。CRN外部研究員として「子どもとメディア研究室」を担当。廃校を利用した「新しい学びの場の実験」や、ウェアラブル・コンピュータをファッションやライフスタイルの視点から考へる「メディアファッション」の研究に参加。また、原宿地域の携帯用ポータルサイト「原宿BOX」の立ち上げに携わる。



Tomohiro  
Kawamura



# 1997

## シンポジウム

「中高生のデジタルな友達づくり」  
 CRN 第1回子ども学シンポジウムとして開催。当時中高生の間で、ポケベル・携帯電話そしてプリクラといったメディアが友達づくりに不可欠なツールでした。今後のネットワーク社会を展望し、子どもたちの未来と人間関係について考えました。

### 出演者：

- あわやのぶこ（異文化ジャーナリスト）
- 香山リカ（精神科医）
- 河村智洋（慶應義塾大学大学院石井研究室）
- 竹村真一（東北芸術工科大学助教授）
- 藤田英典（東京大学教授）



# 1996

7月 **CRNウェブサイトオープン**  
 時代はホームページ創生期。試行錯誤でつくりあげた初代CRNサイトです。



7月 **シンポジウム**  
**「マルチメディア社会の子どもたち」**  
 1996年7月26日、チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）は開設記念シンポジウムを開催。「マルチメディア社会の子どもたち」と題し、シンポジウム会場と学校の教室とをテレビ会議で結び、多地点討論会を実現。

### 出演者：

- 石井威望（慶應義塾大学教授）
- 稲増龍夫（法政大学教授）
- 内田伸子（お茶の水女子大学教授）
- 久保田競（日本福祉大学教授）
- 坂本昂（放送教育開発センター所長）



**CRN** 1996 ~ 2002  
**10年の足跡**  
 CRNの誕生～成長期

1996年の設立以来、CRNが歩んできた10年の歴史を振り返ってみました。最初の6年間はイベントやシンポジウムなどを通して、子ども学の認知普及活動に取り組んできました。その結果、国内外の研究者たちとの間に信頼関係が築かれ、後に「日本子ども学会」や中国の研究者たちから研究活動への協力を要請されるまでに発展しました。

注：出演者は50音順。  
 また、肩書きは当時のものです。



# 1998

## 11月 講演会

### 「チンパンジーと自然のお話」

CRN企画での2回目の講演。小学校6年生の子ども達にむけて、38年間にわたるチンパンジーとの研究生活について話していただきました。

出演者：

- ジェーン・グドール博士  
(ゴンベ野生生物研究所所長)



## 10月 講演会

「チンパンジーの世界と自然のお話」世界的な霊長類研究者ジェーン・グドール博士をお招きし、子どもたちに向けて講演会を開催。子どもたちが真剣に博士のお話を聞き、会場から活発な質問が出たのが印象的でした。

出演者：

- ジェーン・グドール博士  
(ゴンベ野生生物研究所所長)



## 1月 国際シンポジウム

「メディアは子どもをどう育てるのか？」  
「変わりつつある子ども期 メディアは子どもをどう育てるのか？」をテーマに、世界8ヶ国の代表が、マルチメディア社会に生きる人々にとって必要な知恵と今後の指針について意見を交換しました。

出演者：

- アヌラ・グーナセケラ (アジアメディア情報コミュニケーションセンター研究責任者)
- 石井威望 (慶應義塾大学教授)
- イディット・ハレル (ママメディア代表)
- 如月小春 (故人・劇作家)
- セイモア・ババート (MITメディア・ラボ教授)
- 廣瀬通孝 (東京大学助教授)
- 三宅なほみ (中京大学教授)
- 山根一真 (ノンフィクション作家)

ほか

## 10月 講演会

### 「子どもの発達と家族研究」

「保育の質とは、子どもがいかに思いやりのある、かつ個々に注意を払われているかによる。日常的に母親以外の保育に頼っている親は、保育の質の高さを求めるべきである」と共働きの親にメッセージを送りました。

出演者：

- ジェイ・ベルスキー博士  
(ペンシルバニア州立大学教授)

## 12月 CRNウェブサイト ウェブデザインアワード銀賞受賞





# 1999



## 8月 公開座談会

「学級崩壊はしついでくいとめられるのか？」

「学級崩壊」という言葉が世間一般に広がるなかで、その原因を家庭や学校のしつけにだけ求めるのではなく、教育モデルの不在や形骸化にこそ求めるべきではないかという視点から話し合いが行われました。

出演者：

- 荒木肇（生涯学習センター常任理事・川崎市立京町小学校教諭）
- 尾木直樹（臨床教育研究所「虹」所長）
- 木下真（編集者・司会）
- 広田照幸（東京大学大学院助教授）
- 宮台真司（東京都立大学助教授）



# PLAYFUL

## プレイフル

「playful」の「play」は、単に「あそび」「楽しみ」だけでなく、「運動」さらには「ひらめき」の意味もある。「playful」は、「あそぶ喜び一杯」の状態で、「あそび」によって、子どもが生きる喜び一杯「joie de vivre」になることと考えている。(by 小林登)

## 「CRN国際プレイショップ99」

小学校5・6年生を中心とする児童とその保護者、教師約150名が参加。「つくってーかたってーふりかえる」という活動を、大人と子どもが五感を使って、夢中になって行い、みんなで同じ空気を共有しました。

出演者：

- 上田信行（甲南女子大学教授）
- エディス・アッカーマン（MITマサチューセッツ工科大学客員教授）
- 大森美弥（小児心理カウンセラー）
- ジョギ・パンガール（デザインコンサルタント）
- ヒレル・ワイントラウブ（同志社国際中学・高等学校コミュニケーション部主任）
- ミルトン・チェン（ジョージルーカス教育財団エグゼクティブディレクター）
- 宮田義郎（中京大学教授）
- リアン・ラムゼイ（同志社国際中学・高等学校教諭）
- ルース・コックス（女優、教育者）

ほか

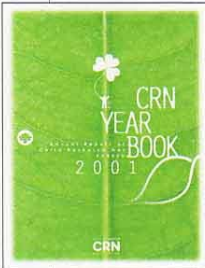
11月



# 2001

## 3月 「CRN YEAR BOOK」創刊

CRNの年次活動報告書が創刊。脳科学、人類学、経済学など多様なジャンルの専門家とCRN小林所長が子どもについて語る巻頭対談は、創刊以来の人気コーナーです。



2001 最新の脳科学は、  
子ども観をどう変えるのか？  
澤口俊之（北海道大学教授）

2002 子どもは「心と体」で遊ぶ  
麻生武（奈良女子大学教授）、斎藤孝（明治大学助教授）

2003 未来のアトムは子どもを超えるのか？  
田近伸和（フリージャーナリスト・作家）

2004 シナプスの微量物質が  
心と体のバランスを支配する  
持田澄子（東京医科大学教授）

2005 脳の巨大化とともに長期化した子ども期  
馬場悠男（国立科学博物館人類研究部部長）

2006 子どもを粗末にしない国にしよう  
～社会的共通資本の視点～  
宇沢弘文（経済学者）

# 2000

## 1月 公開座談会

### 『「学校」と「家庭」を結ぶもの』

テーマ論考「働く母親の子育て支援」の関連企画。「子どもはどこで社会性やルールを身につけるのか？」と題して、学校・家庭・地域の連携、「学校」の役割を再構築する、などの意見交換をしました。

出演者：

- 木下真（編集者・司会）
- 藤田英典（東京大学教授）
- 牧野カツコ（お茶の水女子大学教授）
- 渡辺秀樹（慶應義塾大学教授）

## 7月 プレイショップ

### 「Feel the Media」 in 吉野

幼児～高校とその保護者を対象に、「メディア」を感じ、家族で楽しむことができるプレイフルな空間をつくりました。

### PLAYSHOP at ワールドユース ミーティング2000 in 名古屋



## 7月 国際シンポジウム

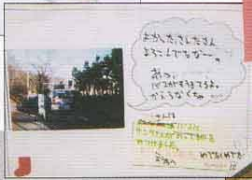
### 「21世紀の子育てを考える」

米国NICHDの行った「子育てのあり方、とくに早期保育は子どもの体の成長や心の発達にどのように影響するか？」の研究をもとに、子育てのあり方や早期保育について活発な議論が展開されました。

出演者：

- 今井和子（東京成徳短期大学教授）
- 内田伸子（お茶の水女子大学教授）
- サラ・フリードマン（米国NICHD研究員）
- 高木友子（郡山女子大学講師）
- 牧田栄子（育児ライター）
- 松本寿通（福岡市医師会乳幼児保健委員会委員長）





### プレイショップ

①プログラム内容、②人との関わり、③道具（メディア）、④ハード環境、の4つの観点から子どもがプレイフルになるための要素を研究するために、さまざまなテーマでワークショップを設計し、実施し、考察を行いました。

- 3月 ・「雪が届けるメッセージ」
- 6月 ・「プレイフルマジック1～生き物つながり～」
- 7月 ・「プレイフルマジック2～星に願いを～」
- 8月 ・「プレイフルマジック3～セミの冒険～」
- 12月 ・「ふゆものがたり～プレイフルストーリーをつくろう～」



### 4月 「ながやまチーきち」開設

プレイフル研究を発展させ、東京郊外の廃校の一室に、「新しい学びと遊びの実験場・ながやまチーきち」を開設。定期的なプレイショップの開催と小学校低学年を対象にした遊び場を提供し、研究を進めました。





# 2003～

# 2002

11月 プレイショップ

### 「カラフル王国であそぼう」

「カラフル王国」という架空の舞台の中で、子どもたち自身が「住人」になり「王国」を「建設する」という設定。身にまとうもの（服や帽子やお面）にいろいろな材料でつくった好きな色を塗り、好きな装飾を施すなど、多方面から子どもの想像力を刺激するアプローチを試みました。



1月

### CRN実践保育研修会

#### 「保育の質を考える — 心とからだを育む視点から」

保育に関する講義のほか、脳を育む「運動保育援助プログラム」の実技講習も交え、子どもの心とからだを育てる実践的な研修を行いました。

出演者：

- 磯部頼子（前・全国国公立幼稚園長会会長）
- 柳澤秋孝（松本短期大学教授）



3月

プレイショップ

### 「チーきち子どもスタジオ

— 映画をつくろう! —



## 2003年～ 新たな活動のステージへ —「子ども学」研究と中国—

CRNは設立当初からさまざまな活動に取り組み、学問の領域や職業の違いを超えて、子どもに関心をもつ人々との信頼関係を大切にしてきました。アクセス数や知名度を上げることを目的とした実験的な段階を終えて、子どもに関する情報拠点として安定した役割を果たすと同時に、新たな領域への扉を開きつつあります。

CRNの活動のキーコンセプトは子ども学。20世紀後半からのヒューマン・サイエンスの急激な進展により生まれた、子どもの謎を解明するための創造的な学問です。現在、CRNは子ども学の裾野を世界に広げていくために、中国語による子ども学の発信を開始し、東アジア圏の国々との

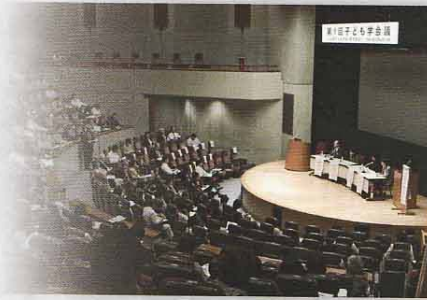
ネットワークづくりに着手しています。（詳しくはP14～17をご覧ください）







## CRNの子ども研究支援



ウェブサイトを核とする研究所であるCRNは、そのメリットを最大限に活かして、研究支援のネットワークを広げる活動を進めています。

# 「子ども学」の広がり

## CRN子ども学研究会から 日本子ども学会へ

日本子ども学会の前身である「CRN子ども学研究会」\*1がスタートしたのは、2002年春のことでした。子育てや教育に関する理論研究や実践研究、最新のヒューマン・サイエンスに基づく子ども研究の報告など、幅広くテーマを設定した上で、メンバーが話題提供のためのレクチャーを定期的に行いました。研究会の成果は、子どもたちと科学をめぐって語り合う「子どもサイエンス・トーク」の実施や研究会の内容をまとめた『子ども学研究会Report2002』の発刊へとつながっていきました。

やがて研究活動の広がりとともに、より多くの専門家を集めて、学際的な子ども研究を進展させるための「日本子ども学会」の構想が生まれました。翌2003年11月には、研究会が設立準備会を兼ねる形で設立総会を開催。2004年の4月からは学会員の募集を始め、その後は毎年の学術集会の実施と、学会誌『チャイルド・サイエンス』の発行を中心とした活動を続けています。

CRNと日本子ども学会はそれぞれ独立した組織ではありませんが、どちらも小林所長の子ども学の考え方をベースにしており、誕生の時点から協力関係にあります。例えば、CRN主催の「チャイルド・サイエンス懸賞エッセイ」は、子ども学の啓発を促進する重要な活動のひとつとなっていますが、毎年多くの作品の応募があり、優秀作品の授賞式は日本子ども学会の学術集会の場で行われています。







## 「子ども学」を学ぶ人たちのネットワークづくり

「子ども」や「子ども学」を冠する学部、学科、専攻が全国の大学・短期大学で増えていることをご存知でしょうか。2002年度に3大学に初めて設置され、ここ数年は毎年10校以上の学校に子どもに関する専門学部等が生まれています。

CRNでは2006年度に38大学25短大を対象に、「子ども」を冠する学部学科の現状を調査し、第3回子ども学会議にて発表を行いました。子どもの問題が複雑化、深刻化する中で、既存の学問の枠を超えた知識を子どもの専門家に求める社会的な要請が、その背景にありました。一方で、「子ども学」という学問分野や子どもを対象とした学際手法が確立されておらず、教育内容に不安を抱える現場の声も聞こえてきました。

CRNでは、そのような時代の要請に応えようとする高等教育機関とも連携して、子ども学のネットワークを広げていきたいと考えています。2006年4月には「日本子ども学会」と協力し、子ども関係の学部や学科が多い関西地区で「関西子ども学大学関係者の集い」を企画。関係する大学・短期大学に「子ども学」研究情報を届けたりするなど、「子ども学」を教え、学ぶ人のネットワークづくりに取り組むなど、多方面からのサポートを行っています。

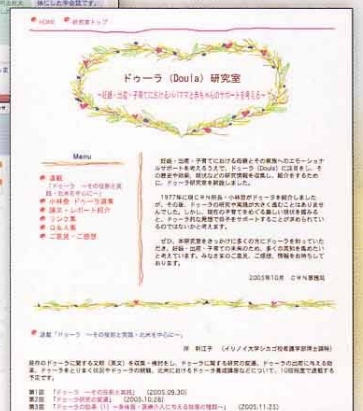
\*1 メンバーは、小林登氏、佐倉統氏、安藤寿康氏、宮下孝広氏、神原洋一氏、牛島廣治氏、木下真氏。  
\*2 Doula。妊娠、出産、育児を援助する女性のこと。

## ウェブサイトを活用した子ども研究支援

21世紀になって誰もが気軽にウェブサイトをもてる時代になりましたが、サイトの開設や運営には人手と手間がかかります。そこで、CRNでは関係のある、日本小児総合医療施設協議会（JaCHRI）、日本赤ちゃん学会、日本子ども学会、国際子ども学研究センターの公式サイトを運営をお手伝いしています。CRNのもつサイト運営の基盤とノウハウを使って、これらの団体の普及活動に大きく貢献しています。

また、研究成果を一般の方に知っていただく方法の一つとして講演会やシンポジウムの開催がありますが、CRNを利用する研究者のPR活動のお手伝いもしています。CRNには約7000人の子ども関係者が登録するメンバーズ制度があり、サイトにも毎日多くの方がアクセスしています。CRNのイベント情報ページやメルマガにお知らせを掲載することで、より幅広くより迅速に開催情報をお伝えすることができるのです。

さらにCRNでは将来を担う若手研究者の活動も支援しています。大学院で学ぶ学生たちの中には、既存の学問の枠内に収まらない新たなテーマに挑戦する人もいて、研究発表できる場所は決して多くありません。CRNでは興味深い研究に取り組む若手研究者を応援するために、サイト上に発表の場を設けています。これまでに「ドゥーラ」\*2「ディスレクシア（難読症）」「ソーシャルスキルトレーニング」「学習環境デザイン」などの研究を支援しました。このサイトが同じような研究に携わる人同士の出会いの場となり、また新たな研究課題の発見の場ともなっています。





# 国境を超えての活動

## 中国語版開設後の“児童科学”



2005年2月（旧正月）にCRN中国語版をオープン。ウェブサイトを通しての日中交流とともに、両国の子ども研究学者の人的交流も進んでいます。

### 日中「子ども学」研究者の交流

ウェブは情報交換する上で格好の手段ではありませんが、顔の見えるオフラインの人的交流も欠かせないものと考え、CRNはサイトの運営と同時に、日中の学者の相互訪問による学術交流を進めてきました。

2004年のCRN中国語版の準備期～2006年まで、小林所長が中国で4回の訪問講演をし、中国の子どもの現状をふまえた上で、中国の専門家とさまざまな意見交換を行いました。また、中国から専門家を日本へ招聘し、日中子ども学研究者との交流の場を設けるなどの活動も行いました。



### 情報の窓口としてのウェブサイト

CRN中国語版には、「子ども学」（中国語名は「児童科学」）を紹介する日本発の情報に加え、中国の幼児教育の専門家からの原稿も多く掲載されています。一人っ子の我が子によりよい教育を受けさせたいと考える、中国の子育て熱心な親たちにとって、科学的な根拠に基づく育児理念とノウハウは大変魅力的です。日中両国の学者の知見を集め、そのニーズに応える存在であるCRNは、子どもの親のみならず研究者や教育関係者からも支持を受け、アクセス数を伸ばしています。

日中「一衣帯水」、それぞれの国の事情がありながら、子ども問題でも共通する部分がたくさんあります。コンテンツをさらに充実させ、専門家・親・教育現場を結ぶ役割を果たすとともに、日中の子ども研究を知るための窓口としても機能するよう、CRN中国語版を発展させていきます。



## ● CRN主催の分科会

2006年8月、中国吉林省長春にて「中国学前教育研究会 健康教育專業委員会第6回學術會議」が開催されました。この会議の中で、小林所長が基調講演を行い、午後には、CRN主催の分科会が実施され、お茶の水女子大学教授の榊原洋一先生が食育の重要性について発表しました。

子どもの肥満が問題になっている中国では、「食育」への関心が高まっており、医学的な立場からの子どもの教育への提言ということで中国の専門家にも多くの示唆を与えたようです。



## ● CRN 所長訪中講演

### ● 宋慶齡基金会主催の 国際フォーラムにて

中国福利会宋慶齡基金会の招聘により、2005年10月に上海で開催された国際フォーラム「多文化共生を背景とした幼児教育」にて、小林登CRN所長の基調講演が行われました。テーマは「Joie de Vivre ～子ども達にとって『生きる喜び一杯』はいつでもどこでも必須のもの～ 情動の子ども学」。子どもを生物学的視点から捉え、教育と有機的に結びつける「子ども学」に参加者は大変な刺激を受けたようです。



### ● 人口計画生育委員会の 国際シンポジウムでの講演

2006年10月、秋晴れの好天気に恵まれた上海で、都市人口政策を管轄する人口計画生育委員会主催の「乳幼児の教育と早期発達」国際シンポジウムが開催されました。小林所長は主賓として招かれ、「生体リズムと乳幼児の成長・発達」をテーマに、生物学的な側面から、睡眠リズム・生体リズムと乳幼児の成長発達との係わりについて講演しました。



## ● 中国子ども研究者の日本訪問

2005年9月、日本子ども学会「第2回子ども学会議」が開催されました。それに合わせ、中国より2名の学者を招聘し、日本で「子ども学」に関心を持つ研究者との交流を企画しました。来日されたのは、朱家雄教授（華東師範大学）と田輝研究員（中央教育科学研究所）。会議中には、「中国における就学前のケアと教育の発展と現状」についてご講演いただき、多くの参加者が中国の幼児教育について知る貴重なチャンスとなりました。

会議終了後の歓迎レセプションでは、発達心理、脳神経科学、ロボット工学、認知科学などさまざまな分野の専門家が、自身の研究と子どもへの関心事を語るなど、活発なディスカッションがなされました。



日本で生まれた「子ども学」は、たくさんの研究者・賛同者の方たちの協力を得ながら、隣国の中国そして東アジアへと旅立とうとしています。どの国でも子どもに関する多くの問題が存在していますが、CRNは、国境を超えてさまざまな分野の専門家が語り合うためのネットワークの中核となることを願って、今後の活動を進めていきたいと考えています。







日中英3サイト紹介

# 多言語で世界に向けて情報発信

CRNは日本語版だけではなく、英語版、2005年には中国語版を開設し、3つのサイトで世界に向けて情報発信を行っています。各国の専門家・教師・保護者の方々とネットワークを通じて子どもの問題を共有しつつ、今後は、ますます大容量化、高速化するインターネットを活かしてより高度な情報発信を心がけていきます。

日本語

<http://www.crn.or.jp/>



### おすすめコンテンツ

#### ドゥーラ研究室

妊娠・出産・子育てにおける母親とその家族へのエモーションサポートを考えるうえで、ドゥーラ (Doula) に注目をし、その歴史や効果、現状についての研究情報を紹介しています。

#### 子ども未来紀行

国内外の研究者・実践者から寄せられた研究レポート。さまざまな視点からの子ども研究にふれられます。

#### 子どもとメディア研究室

CRN設立時から続く研究室。メディアの変遷に合わせ、子どもたちのメディア利用の実態を追っています。子どもへのインタビューやワークショップ、ネット上の調査などの活動内容とレポートなどを掲載しています。

\* 研究室の一部と会議室(フォーラム)の利用にはCRNメンバーズへの登録が必要です。





http://www.childresearch.net/

英語

おすすめコンテンツ

Monthly Articles on Children

CRN スタッフや研究者が交代で担当するコーナー。子どもに関する話題をさまざまな視点から取り上げています。

Recent Research on Japanese Children

日本の子どもに関する調査研究、レポート、読み物などを掲載しています。

Issues of Childhood and Parenthood in Modern Japan

教育学の専門家が、自身の母親としての視点も踏まえ、日本の子育て事情をレポートしています。



http://www.crn.net.cn/

おすすめコンテンツ

「宝宝健康成长專欄」(図書館)

小児科医で児童保健専門の万先生の保健に関する特別コーナーです。親向けの子育てに役立つヒントが満載。

「予防接種」(研究課題)

中国の予防接種と日本のものを比較してみても面白い。1歳までの予防接種に関しては、中国は日本より種類も回数も非常に多く、驚きます。

「皮皮在日本」(図書館)

中国の心理学専門家による日本留学中の子育て体験談です。子どもと親の目を通して、日本の幼児教育を紹介するページです。

中国語





# CRNユーザーの声

CRNは、各分野の専門家、現場教育者、子育て中の親などさまざまな方からご利用いただいています。  
 利用者のうち、女性が6割を占めています。  
 年齢は10代～70代と幅広く、うち20代～40代がボリュームゾーンになっています。  
 利用者は北海道から沖縄まで全国各地にわたり、海外からのアクセス数も第7位に入っています。  
 職業については、主婦、会社員、大学生が上位を占めています。



## ユーザーの属性

### ・利用者男女の比率



### ・利用者年齢の比率



### ・利用者居住地の上位10位



### ・利用者職業の上位10位



(2006年12月10日現在のCRNメンバー登録情報をもとに作成)

## CRNに寄せられた声をご紹介します

### ◆CRNを利用する理由◆

教育学者ですが、哲学、思想からの研究が専門で、発達心理学や臨床からの研究をしていないので。

(50代男性/大学・大学院教職員)

母親の子育て不安の研究情報としてとても参考になります。教育相談の仕事上、とても役立っています。

(50代男性/自営業・フリーランス)

アタッチメントを研究し、育児支援活動にも携わっています。子どもをめぐるさまざまなトピックスや最新の情報などは、研究にも仕事にも、自分自身の育児にも役立っています。

(30代女性/大学・大学院教職員)

子どもに関する客観的なデータを見ることは子育て中の母親にとって精神的助けとなります。英語版は自己啓発の範囲ですが翻訳の勉強に使うこともあります。

(30代女性/主婦)

世界の子どもの生活などを垣間見ることができる「図書館」は興味深いです。家庭で楽しく取り入れられるところはどんどんやってみたい。

(40代女性/無職・休職中)

イベントや学術集会の開催がタイムリーにわかり、参加意欲をかきたてられます。記事の内容がアカデミックで読み応えがあります。

(40代男性/高校・高専教職員)

### ◆「子ども学」についての関心◆

「子ども」という対象に絞って学際的な研究がされていること。従来の学問的枠組みにこだわらず、「子ども」を理解するうえで必要な研究は柔軟に受け入れていること。

(30代男性/大学・大学院教職員)

近年何ごと専門分化して、逆に全体像が見えにくくなっていることを考えると、子どもを全般に見ていこうという姿勢はとても良いと考えるし、私もそうしていきたいと考えている。

(40代男性/研究者)

時代と共に変化しつつある子どもの姿や、それを作り出している社会の影響などを、いろんな角度から研究し子どもの全体像を捉える参考としたい。

(30代女性/保育園保育士・職員)

### ◆CRNに期待すること◆

子どもといえばCRNと言われるように、認知度が上がることを。

(10代/高校生)

少子化問題、医療問題は単に個の問題だけでなく、社会の仕組み、地域と深くかかわりをもっている。CRNには、個の分野も深く、社会の仕組み、国際的なデータを広く活用し、情報を提示、提案し、世の中を変えていくような、ベシシク研究活動を期待しています。

(60代男性/研究者)

ますます多様化する子どもの世界。その現実をいろいろな視点でとらえた試みを期待しています。特に実践と理論の橋渡的存在になっていただきたいと思います。

(男性/会社員)

\* 2006年1月にCRNサイト上で実施したアンケートの記述と『CRN YEAR BOOK 2006』読者ハガキをもとに作成しました。





## CRN設立10周年記念号



..... 発行日 .....

2007年2月3日

..... 発行 .....

チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)

〒101-8685

東京都千代田区神田神保町1-105

神保町三井ビルディング15階

ベネッセ次世代育成研究所内

TEL : 03-3295-0293

FAX : 03-3518-2553

..... 編集スタッフ .....

劉 愛萍

所真里子

木下真 (木下編集事務所)

..... デザイン・イラスト .....

中村ヒロユキ (Charlie's HOUSE)



乱丁本・落丁本はお取りかえします

無断転載を禁じます

本冊子は再生紙でできています



CRN YEAR BOOK バックナンバー  
B a c k N u m b e r



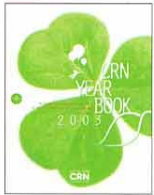
**CRN YEAR BOOK 2001**  
Annual Report of Child Research Net FY 2000

巻頭対談：澤口俊之×小林登  
「最新の脳科学は、子ども観をどう変えるのか？」  
A Dialog between Toshiyuki Sawaguchi and Noboru Kobayashi  
"How are Developments in Neurology Changing our View of Children?"



**CRN YEAR BOOK 2002**  
Annual Report of Child Research Net FY 2001

巻頭座談会：麻生武×斎藤孝×小林登  
「子どもは『心と体』で遊ぶ」  
A Dialog between Takeshi Asao, Takashi Saito and Noboru Kobayashi  
"Children Play with their Minds and Bodies"



**CRN YEAR BOOK 2003**  
Annual Report of Child Research Net FY 2002

巻頭対談：田近伸和×小林登  
「未来のアトムは子どもを超えるのか？」  
A Dialog between Nobukazu Tajika and Noboru Kobayashi  
"Can the Future Astroboy Surpass the Human Child?"



**CRN YEAR BOOK 2004**  
Annual Report of Child Research Net FY 2003

巻頭対談：持田澄子×小林登  
「シナプスの微量物質が心と体のバランスを支配する」  
A Dialog between Sumiko Mochida and Noboru Kobayashi  
"Neurotransmitters: Microscopic substances at the synapse control the balance between mind and body"



**CRN YEAR BOOK 2005**  
Annual Report of Child Research Net FY 2004

巻頭対談：馬場悠男×小林登  
「人類学と子ども：脳の巨大化とともに長期化した子ども期」  
A Dialog between Hisao Baba and Noboru Kobayashi  
"Anthropology and the Child: Prolonged childhood with brain enlargement"



**CRN YEAR BOOK 2006**  
Annual Report of Child Research Net FY 2005

巻頭対談：宇沢弘文×小林登  
「経済学と子ども：子どもを粗末にしない国にしよう」  
A Dialog between Hirofumi Uzawa and Noboru Kobayashi  
"Economics and Children: The perspective of social common capital for a nation that values children"

( バックナンバーはこちらから注文できます。 )  
<http://www.crn.or.jp/LABO/PUBLISH/>



サイバー子ども学研究所

**CRN**

チャイルド・リサーチ・ネット

日本語版

<http://www.crn.or.jp/>

英語版

<http://www.childresearch.net/>

中国語版

<http://www.crn.net.cn/>

チャイルド・リサーチ・ネットはベネッセコーポレーションの  
支援のもと運営されています。



6CC0003